○　おきなわ和牛販促会を開催、「石垣牛」含め48頭が完売、さらなるブランド定着へ

㈱ミートコンパニオンとＪＡおきなわは25日、埼玉・和光市の㈱アグリス・ワンで「おきなわ和牛」の販売促進会を開いた。生産者から流通・販売事業が一体となって首都圏に高品質な「おきなわ和牛」認知してもらい、さらなる振興を図ってゆくために開催されるもので、今回で５回目の開催となる。今回は首都圏の卸売業者ら19社・30人が参加。ちぎり方式により、「石垣牛」６頭を含む出品牛48頭が完売された。最優秀賞はＪＡ八重山肥育センターで生産された「石垣牛」の去勢で、格付けはＡ－５、キロ単価3,200円で、ハヤオが購買した。また優秀賞２頭は西島畜産とニイチクが、優良賞３頭は武屋、日本ハム国内ビーフ課、東和食品、おきなわ和牛賞に寺内商店、石垣牛賞に成城石井がそれぞれ購買した。

「おきなわ和牛」は05年に沖縄県経済農協協同組合連合会とＪＡおきなわの統合を機に、従来の同県のブランド「琉球王」を改めたもの。現在、ＪＡおきなわが所有する７カ所の肥育センターなどで2,800頭が生産されている。さらに「おきなわ和牛」のうち、八重山郡内で育てられたものが

「石垣牛」と呼ばれ、08年に地域団体商標を取得している。ＪＡおきなわによると、「おきなわ和牛」の年間出荷頭数は1,700頭で、「石垣牛」は700頭に上るという。首都圏でも年々評価が高まっており「給与飼料が統一されているため、どの牛肉も味わいが統一され安定しており、顧客からも“さっぱりしている”との評価が寄せられ、リピーターも多い」（ミートコンパニオン植村光一郎常務）という。また沖縄県の肉牛経営は3,160戸・全飼養頭数は８万3,500頭に上り、うち肥育牛は6,500頭で、残る90%が繁殖母牛と子牛だが、肥育を含めた一貫経営も徐々に増えているという。

関東への販売も順調に拡大、安い価格ではなく美味しい“肉づくり”が重要

開会に先立ち、ＪＡおきなわの安次富均常務理事は「関東への販売も順調に拡大しており、06年度の出荷は179頭だったが、10年度は385頭にまで倍増している。11年度は400頭台に乗るのではと期待している。ＪＡおきなわでは安全・安心・安定供給をキーワードに生産に励んでおり、生産マニュアルの遵守と肥育技術の向上に取り組んでいる。今後とも皆さんのご支援・協力、愛顧をお願いしたい」と挨拶した。またＪＡおきなわ畜産部の宮城直部長は「ＪＡおきなわの年間の取扱い頭数はおきなわ和牛が1,700頭で、石垣牛は700頭に上る。石垣牛は700頭のうち500頭が県内消費だが、ゆくゆくは１千頭近くまで拡大してゆく方針だ。おきなわ和牛も県外出荷では福岡と名古屋で900頭、関東へ400頭の規模だが、ミートコンパニオンのおかげで、当初は１カ月当たり１車・12頭の出荷だったが、現在は１週間に１車送られる態勢となっている」と説明した。

また販売促進会終了後、ミートコンパニオンの阿部昌史社長は「家計消費によると、昨年の一世帯当たりの牛肉支出は平成７年のピーク時の半分を割ったという。一方、外食産業では低価格帯のステーキ店などが繁盛するなど、価格帯を下げると肉が売れるという風潮になっていることに空しさを感じている。安い価格に感動することで牛肉消費が伸びるとことは好ましくなく、やはり食べて美味しいと感動することが国産牛肉にとって必要ではないか。この点、沖縄の生産者は、牛づくりではなく、食べて美味しい肉をつくる“肉づくり”を行おうという熱い思いをもっている。我々もこの思いに共感して『おきなわ和牛』『石垣牛』のブランドとして定着するよう支援してゆきたい」と感謝の言葉を述べた。